



TITLE:

京大広報 No. 360

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 360. 京大広報 1988, 360: 549-556

ISSUE DATE:

1988-11-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209319>

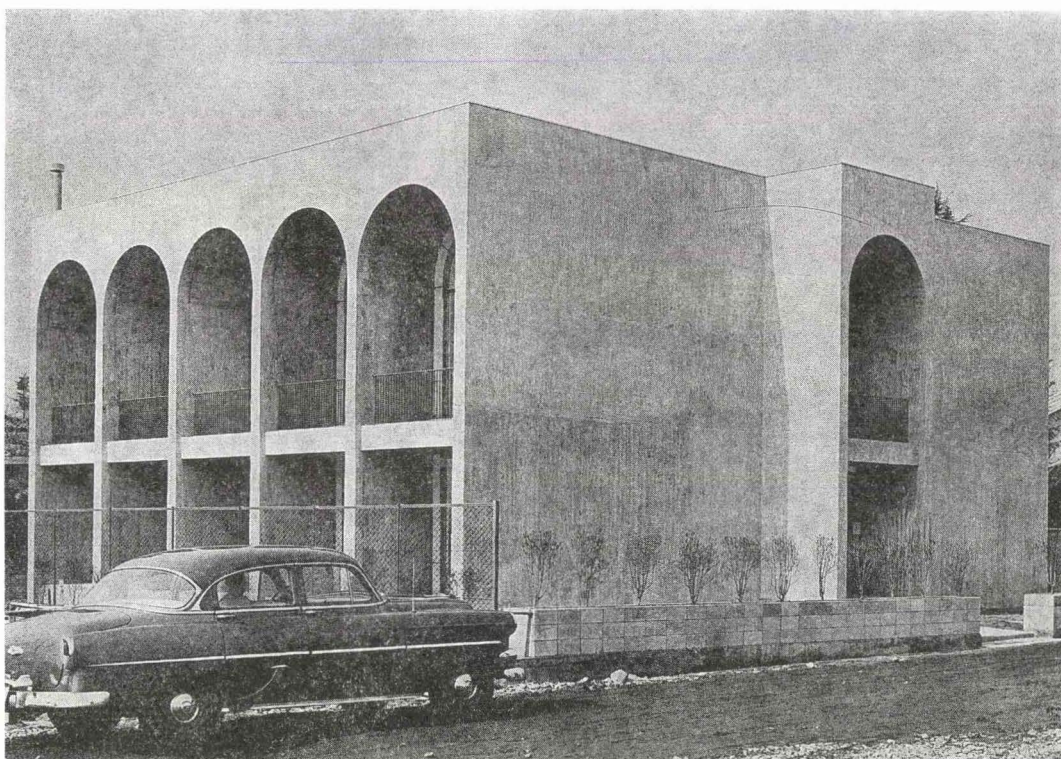
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 360

京都大学広報委員会



創設時の羽田記念館

—関連記事本文 553 ページ—

目 次

西島総長，ドイツ連邦共和国訪問……………	550	訃 報……………	554
昭和63年度京都大学市民講座「みち」		学術講演会の開催……………	555
講演要旨 I ……………	550	能楽鑑賞会の開催……………	555
<栄誉>		日 誌……………	555
(上山春平名誉教授，古村三千三技官)……………	553	<随想>	
<紹介>		所 感	
文学部内陸アジア研究施設（羽田記念館）……………	553	名誉教授 井伊谷 鋼一……………	556

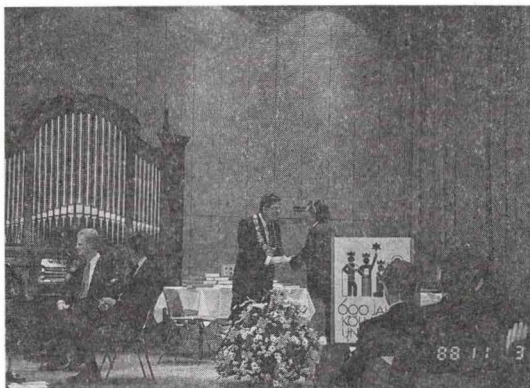
＜大学の動き＞

西島総長、ドイツ連邦共和国訪問

西島安則総長は、10月30日からドイツ連邦共和国における高等教育・研究機関の調査並びに学術交流に関する意見交換のため同国を訪れ、11月6日帰国した。

今回の主な訪問先は、ミュンヘン大学 (LUDWIG-MAXIMILIANS-UNIVERSITÄT MÜNCHEN) 及びケルン大学 (UNIVERSITÄT ZU KÖLN) であり、各訪問先において、大学の管理・運営体制、特に学術・教育の国際交流に対応する組織、制度の現状と大学間協力の在り方等の諸問題について意見交換を行った。

なおケルン大学では、同大学創立600周年記念式典に出席し、祝辞を献呈すると共に、大学間国



ケルン大学の創立 600 周年祝賀会にて東西文化交流と大学について講演のあと、ハナウ (P. Hanau) 学長に祝詞を述べる西島総長 (1988年11月3日)

際交流に関する諸問題等について参加各国の大学長と懇談した。

今回の訪問には、磯田 潔庶務課課長補佐が同行した。

昭和63年度京都大学市民講座「みち」

講演要旨 I

さまざまなみち

—「道」の字から説き起こして—

人文科学研究所教授 尾 崎 雄二郎

齋藤茂吉の、歌集『あらたま』に収められた「一本道」の連作、高村光太郎の詩集『道程』の名のもとになった同名の詩一篇、これらに待つまでもなく、「みち」ということばは、しばしば人間の努力の作りあげたもの、人間の、自然への働きかけの成果として、まちがいなくそこに在るもの、といった一種の存在感とともに使われるときがある。

日本の場合、その「みち」に乗って遥か精神の高みにまでも飛翔しようというのでもあろうか、かつては何々の術、何々の法というように、単なる技術の体系としてしか扱われていなかったものに、何々道の名が奉られていることも多く、ことによるとそれは、下級武士の主導による明治の変

革がもたらした、肩ひじ張った思想状況と対応する面もあったかも知れない。

たとえば柔道は、もともと「やわら」、漢語めかしてもせいぜい柔術であったものを、講道館が「道」に格上げしてしまったもの。精神を強調する余り、術という出自を忘れ、国際大会では惨敗、というようなことになっているのではないか。

人の歩く道以外の「みち」が、何かに到達するための手段として同じく「みち」と呼ばれるのは、しかし、もとより日本だけのことではない。メタ・ホドス、つまり道に従って、というのが英語の method など、ヨーロッパのことばの大部分に共通する「方法、方途」を意味する語の起源であったといわれるのも、漢字の「術」が「行」すなわち四つ辻の象形を主体にしている、つまりは「みち」であるのと同巧であり、いずれも同じく比喩に発している。ちがうのは、日本が尊卑二層の「みち」を考えようとしているらしいことだけである。

『礼記』が、「道路は、男子は右よりし、女子は左よりし、車は中央よりす」、つまり男と女とで右側通行、左側通行の差別があるべきだとするのは、人間の男女はもともと間違いを犯し易いものであり、さればこそ「袖すり合」わぬ規制によ

って、あらぬ誤解も未然に避けようという儒家の、過ぎた親切というべきものであろうが、それとは思考の対極に立つことも辞さないと見た道家の人間が、道とは、それに従って歩くしかないものと思ひこんだらしい話もある。『淮南子』にいう、「楊子 岐路を見て哭す。其の、以て南すべく以て北すべきが為なり」。楊先生が二また道を前にして、これでは人間どちらを選ぶかで、北か南か、全く違う結果も出てしまうではないか、そう思うと、つい大声あげて泣いてしまった、というのである。

楊先生つまり楊朱は、なにもそんなことで泣いて見せることもなかったのだ。かれの学派の創始者とされる人は、その著『老子道徳経』の中で、「道の道とすべきは常の道にはあらず」、これこそ道と指さしていえるような道は、永久不変の道などというものでない、といっているではないか。楊朱の行く手がたとい幾つに分れていようとも、かれは泣き声をあげたりせず、心眼をもって不変の「常道」を見すえ、そうして歩くべきであった。

そもそも「道」という漢字自体が、さまざまある「みち」の中で、一つの目的地にしか到達できない、分れ道なしの「一本道」を本義とするという、古い字引きもあるのである。もっとも楊朱が直面したのは「道」でなく、「岐路」という「路」ではあったのだが。

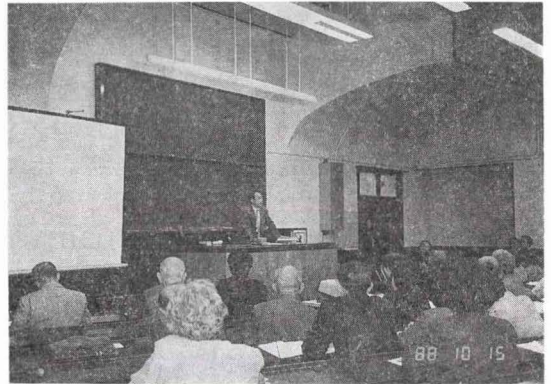
(10月15日)

からだの中のくすりのみち

薬学部教授 瀬 崎 仁

くすりは、生命健康の維持という人間の根源的欲求に直接関連するものである。くすりの科学は、今世紀の後半になって著しい進歩を遂げ、多くの病気から人命を救う手段を医療の場に提供してきた。また、患者の苦痛を和らげるだけでなく、治療期間を短縮して医療経費を軽減し、患者の社会復帰を早めるなど、一種の公共財として社会経済的にも重要な役割を果たしてきた。

新しいくすりの導入によって、かつては不治の病と恐れられ、小説のヒロインにしばしば悲しい結末をもたらした結核も患者数が激減し、他方高齢化社会といった問題がクローズアップされるな



さまざまの道と題して講義を行う尾崎教授

ど、くすりが疾病構造や人口構造をも大きく変貌させてしまった。すなわち、くすりの発達は、人生の長さのみならず、ある意味では質までも変化させたというべきかもしれない。

このようなくすりは、形として“物”ではあるが、実際にはその物が生体に対して持つ“作用”を医療目的に利用しようとするものであり、その作用も、ある特定の条件や目的の下に用いられて初めて有益なものとなる。したがって、くすりを利用するという行為のあり方は、くすりの死命を制する場合すらあるということができる。すなわち、目に見える形としてのくすりの進歩に対応して、本来備えている望ましい面を最大限に引き出す一方、それが併せ持っている望ましくない作用をできるだけ抑えるといった、いわば物を適切に利用する知識、また物のもたらす効果や影響を正しく評価する理論や技術の確立を欠かすことはできない。

人々の念頭にあるのは、くすりがからだに働きかける結果としての効果であるが、からだは逆に、送り込まれてきたくすりに働きかけ様々な対応を試みる。このため、くすりが効果発現に関与する部位にたどりつく迄の時間や量は、人によってかなりの変動が見られることになり効果の程度や持続時間にも影響が現れる。また年齢や併用されるくすり、病気そのもの、さらには送り込まれてくるみちによっても大きな変動が見られる。治療や病状のコントロールが困難であるとされてきた「がん」、「遺伝性疾患」、「免疫性疾患」などに対する新しいくすりの中には、強力かつ特異な作用様式を持つ物が少なくない。したがって効果や

毒性の発現を精密にコントロールし、治療の最適化を果たすためにも、どのような計画（量や投与のタイミングなど）に従って、どのみちを通してからだの中に送り込むかといった投与手段についての情報と、それらを総合して実用化形態に仕立て上げるための研究や技術開発を欠かすことはできない。

(10月15日)

海 の 道

—東南アジア海域世界—

東南アジア研究センター

教授 高 谷 好 一

東南アジア海域世界は5000年の歴史の中で形成されてきた。それは次の5つの歴史的出来事の重層だと考えると理解し易い。

1. ラピタ人の大拡散：フィリピンから南太平洋のトンガにかけてラピタ土器といわれる土器の分布が見られる。全面に施された精緻を極める刺突模様は、それがまるで青銅器であるかのように見える。土器は古いものでは紀元前3000年ぐらいとされている。この古い時代に、極めて高い土器技術を持った一群が太平洋に乗り出したようである。彼等は双胴舟とアウトリiggerで海を渡ったようである。彼等はまたイモと豚を太平洋の島々に広めたようである。
2. ドンソン文化の展開：おそらくは紀元前2～3世紀の頃からであろう、弥生文化の南方版とでもいうべき文化の展開が東南アジア一円に起る。稲と水牛と酒と、それに、ドンソンドラムと呼ばれる祭器を持った人達が広がった。ドンソンドラムは銅鐸と同一の機能を持つという説が強い。そのドラムに刻まれたドンソン人は、しばしば、頭に大きな鳥の羽根飾りをつけ、集団で細身の船を漕ぐ姿で示されている。
3. 東西交易の中継港：紀元前後には中国の絹と地中海地方の宝石やガラスの交換が活発になる。後には中国の陶器やインドの綿がこれに加わった。いわゆる東西交易である。中国の舟は南下して、マレー半島附近で東進して来る地中海の舟を待った。風待ちに都合のよいマレー半島は、この頃極めて重要な中継港で賑わったようである。

4. 熱帯多雨林の香料積出し：東南アジアの熱帯多雨林は世界に類を見ない香料の豊庫である。エジプトや地中海の商人は早くから胡椒や沈香を求めてここに到来した。東南アジアには紀元後5～6世紀には香料積出港が多く出現する。それらはインド式の名を持った王を戴く、インド風の港であった。13～14世紀になると、これらの港はイスラム商人の港にかわる。そして、それは16世紀の大航海時代以降は、ヨーロッパの軍艦の支配する所となった。

5. 珊瑚海の南海物産採取：14世紀頃から、ナモコやフカノヒレ等の南海物産採取が始まる。ウォーレス線より東がその産地である。それはオーストラリア北岸や、ポリネシアに延びている。多くの船が広東からこの海域に向った。今はこの海域は日本のマグロ漁が行われる所となっている。

かくして、歴史を通じて、東南アジアは海のクロスロードにあたっていた。その結果、そこには独自の海域文化が発達し、歴史は海を中心にして展開してきた。この東南アジアの海域文化圏、いいなおせば、マレー型文化圏は広く、西はマダガスカルから、東はハワイ、トンガに至っている。

(10月22日)

動 物 の み ち

理学部教授 川那部 浩 哉

世に「けもの道」という語がある。『日本国語大辞典』を引いてみたところ、「けものが通ることによって自然に作られた山中の小道。また、ふだんけものが通う道」とあった。この説明の前半と後半は違うものを指していて、私なりに解釈すれば、前者は過去に起った現象の結果を問題にするだけで現在の意義を問わぬもの(第1のみち)、後者はその原因を問わずに現在の過程のみを問題にするもの(第2のみち)、とでも分けられようか。

ついでに人間の「みち」も引いてみたところ、「人の行き来するところ。また、その往来にかかわる事柄をいう。通行するための筋。通行の用に供される所で、地点をつないで長く通じているも

の」と始っていた。いささか解り難い説明ながら、引用した最後のものは、出発地と目的地があらかじめ設定されていることを示そうとしたものだろう(第3のみち)。

このような意味でのさまざまな「みち」は、動物ではどのように認められるだろうか。モグラの坑道は見た眼にはみちの最たるものだが、あれは2度とは通ることのないものだということから、せいぜいが上に挙げた第1のみちに過ぎない。

渡り鳥で典型的なように、季節に応じて互いに遠く離れた生息場所を利用するような動物では、上に挙げた第3のみち、途中は通過するという意味でのみちがはっきりしている。巣場所と採餌場所とが分れている動物の場合にも似たようなことが起っていて、例えばシロアリの塚の周囲には森林への道が放射状に存在していると聞く。これは上にあげた第2の意味のみちの中で、最も第3に近いものともいえよう。

だがその他大勢の動物にとっては、敵の攻撃からうまく身をかわしながら、質の良い餌を充分に得られるようにと動き廻っているのが普通である。「みちくさを食う」こと自体が本来の目的なのだ。ただその動きの軌跡を地図上に画いてみると、比較的たくさんの軌跡の重なり合う場合が生じる。

実は昨日亡くなられた恩師の宮地伝三郎さんか

ら、最初私に与えられた研究主題のアユという魚の泳跡もまた、そういう傾向を持っている。川の瀬の石の上あるいは間を素早く泳ぎながら、石に付着する藻を唇の歯でこそぎとるのがその日課だが、その泳ぎには石の並びかたや水の流れ、藻の生え方の僅かな違い、アユの反転できる曲率半径、さらには隣りの個体の状態も関連していて、おのずからに良く通る所とそうでない所とができる。

ある場所にすみついて時間が経てば、こちらの岩角ではなくてあちらの岩蔭を通るといった、個体の好みも魚にも厳然と表れることも、克明な調査の結果最近では解って来ている。そしてそれには、付近にすむ同種・異種の個体の存在が強く関係していることも解ってきた。

動物の各個体の生活のしかたは、もちろんでたらしめられているのではない。しかし逆に、動きのとれないかたちでがんじがらめに決っているでもない。多くの時と場所ではいわば曖昧に成り立っているものであり、何かのときに比較的是っきりとある側面が現れるらしいということが、意識的に調査してみてもやっと最近明らかになり始めている。私どもにとっての「みち」は、一つにはその曖昧さをいかに科学の言葉にのせるかであり、一つには比較的是っきりする局面がどのようなときにどのように現れるかを明らかにすることのような気がしている。(10月22日)

＜栄 誉＞

上山春平名誉教授(元人文科学研究所教授 哲学・現京都国立博物館長)

わが国学術の向上発展のため顕著な功績をあげたことにより、昭和63年11月3日紫綬褒章が授与された。

とむらみ ちぞう

古村三千三技官(医学部附属総合解剖センター)

医学における教育・研究の補助的業務に関し顕著な功労があったことにより、11月7日、文部大臣から昭和63年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けた。

＜紹 介＞

文学部内陸アジア研究施設

(羽 田 記 念 館)

出町柳から賀茂川沿いの加茂街道を北西に約4km、上賀茂神社西方の北区大宮南田尻町に文学部

内陸アジア研究施設(羽田記念館)がある。本施設は、本学文学部教授(東洋史学)で第12代総長でもあった故羽田亨博士(1882~1955)の学問的業績を記念し、あわせて内陸アジア全域の歴史・言語・文化・社会・宗教等の研究を推進する目的で設立された研究機関である。あらためて言うまでもなく、博士は内陸アジア地域の諸言語に通

じ、その豊かな言語学的造詣をトルコ・モンゴル・満洲など北アジア・中央アジア諸民族の歴史研究に活用して、斯学の分野に未曾有の新境地を開拓した世界的な東洋学者であった。

本施設の鉄筋2階建ての建物は、本学工学部の増田友也教授の設計になり、三島海雲記念財団及び武田薬品工業株式会社の援助を得て、1966年3月に完成した。1階が応接用ホールと講演・会議室、2階が研究室（4室）及び図書閲覧フロアからなっている。

所蔵図書は、博士の専門分野に関わる漢・蒙・回・蔵・満の諸典籍をはじめ、中央アジア・西南アジア地域に関するトルコ・ペルシア・アラビア・インド等の諸語文献及び欧米の研究書・雑誌が中心であるが、東南アジア関係の書籍も若干架蔵されている。蔵書数は現在およそ九千冊余りにのぼる。内陸アジア・西アジアの関連文献をまとめた形で所蔵する機関が全国的にもなお数えるほどしか存在せぬことを思えば、本施設の存在意義は甚だ大きいといえよう。

本施設の活動としては、まず定例となった春と秋の羽田記念館講演会がある。原則として毎回2名の講師を招き、本施設にふさわしい演題で講演をお願いしている。1980年6月に第1回の開催をみたこの講演会も、本年秋で早や第18回を数えるに至った。

また本施設では、定期的な研究会・講読会も活発に行われており、本学関係者のみならず広く関西一円からメンバーの参加をみている。さらに本学教官・学生によって常時利用されているほか、国内はもとより海外からの著名な東洋学者たちの訪問も数多い。イスラム史のバーナード・ルイス（英、のち米）、モンゴル学のヴァルター・ハイスイヒ（独）、トルコ学のオメリヤン・プリツァク（米）、ルイ・バザン（仏）ら諸教授の来訪は

その一端である。

また本施設からはこれまでに以下のごとき学問上の成果が刊行されている。

・田村実造、今西春秋、佐藤長 編

『五體清文鑑譯解』 上巻 （1966年）

同 下巻・総索引 （1968年）

・羽田明、萩原淳平 他編

『明代西域史料明實錄抄』（1974年）

・『回疆志（永貴撰 李文田鈔本）書寫版』

（1984年）「羽田記念館中央アジア研究会」

これらに引続き、今後も重要な学問的成果の刊行を予定している。

なお本館の講演・会議室は、学会や会合の場所としても広く活用されている。1978年、1979年に日本モンゴル学会が、また1983年に第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議の第6部会特別講演会（アルタイ諸民族の歴史・言語・文化）が開催されたのはその一例である。

以上に加え、今年6月には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（A. A. 研）の協力を得て、パーソナル・コンピュータが本施設にも導入設置された。現在、本施設主事である間野英二文学部教授（西南アジア史学）を中心とする研究グループによって、このコンピュータを駆使して、ムガル帝国の創立者バーブル（1483～1530）の遺したチャガタイ・トルコ語による自叙伝『バーブル・ナーマ』のデータベース化作業が進められている。A. A. 研の大型コンピュータとの連携による、『バーブル・ナーマ』の信頼し得るテキストの完成・出版と総合的・網羅的な索引の作成がこの作業の第一の目標である。

なお本施設は、いまだ官制化されていない。しかし今後とも、地味ながらも着実な実績を積み重ね、内陸アジア研究の発展に寄与してゆきたいと考えている。

（文学部）

計 報

清水 純一（本学名誉教授・京都大学文学博士）

11月1日逝去、64歳。昭和24年本学文学部卒業。48年本学文学部教授就任、63年退官。その間文学部長（54年～55年）を併任。専門はイタリア文学。

鈴江 ^{きたす} 懐（本学名誉教授・医学博士）

11月4日逝去、88歳。大正13年本学医学部卒業。昭和22年本学医学部教授就任、38年退官。その間評議員（36年～38年）を併任。41年紫綬褒章、46年勲二等瑞宝章。専門は病理学。

学 術 講 演 会 の 開 催

昭和63年度秋季学術講演会を下記のとおり開催します。本学教職員・学生の来聴を歓迎します。

記

日 時 昭和63年12月12日(月)午後3時から
場 所 京大会館210号室(2階)
講 師 柏 祐賢(本学名誉教授)
演 題 組織的機械化時代の人間教育

講師略歴

1933年京都帝国大学農学部農林経済学科卒業。
1936年京都帝国大学助手、講師、助教授を経て1947年教授に就任。1967年京都大学学生部長、1969年同農学部長事務取扱を併任。1971年退官。同年京都産業大学教授に就任。現在、京都産業大学長。同大学理事長。農学博士。

同氏は、専門の農学分野ばかりだけでなく、人文・社会科学にまたがる広汎な学問領域に数多くの業

績をあげ、学術の進展に貢献するところ極めて顕著なものがあり、とりわけ農学の基礎的原理の確立を目指し、一貫して資本主義社会における農業問題の解明に心血を注がれ、「農学原論」という新たな学問的領域を開拓された業績は大なるものがある。

また、多彩にして総合的な学問的業績に基づき、現実の諸々の農業問題について明確な解答を与えつつ、農業界に対する指導的役割を果され、日本農業の発展に寄与されてきた功績は高く評価されている。

一方、同氏の学会への貢献も大きく、日本農業経済学会において副会長、会長を勤められ、また関西農業経済学会の代表理事として、多年にわたり学会の発展に寄与されてきた。

著書には、1947年の『経済秩序個性論』、1962年の『農学原論』、1968年の『危機の歴史観』の3大著書をはじめ、『農業政策』(1950年)、『資本主義のメカニズム』(1957年)、『農政の基調』(1970年)他多数がある。

能 楽 鑑 賞 会 の 開 催

本年度能楽鑑賞会を下記のとおり開催します。本学教職員・学生の来場を歓迎します。

記

日 時 昭和63年12月8日(木)午後6時開演
場 所 京都観世会館
京都市左京区岡崎門勝寺町44
(東山仁王門を東へ約300メートル)

演 目 狂言「^{むなつき}胸突」 茂山千五郎
茂山千之丞
能「^{しゆんかん}俊寛」 片山九郎右衛門
青木道喜
片山清司
その他

入場無料

(学生部)

日 誌

(1988年10月1日～10月31日)

- | | |
|--|---|
| 10月3日 京都大学春秋講義 月曜講義第1日(以後、10月17日、31日、11月14日、28日) | 20日 フランス共和国 Paris 第7大学 Jean-Jacques Roubine 国際交流担当副学長来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 11日 評議会 | 24日 連合王国高等教育使節団 C. Watson 教授外19名来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 12日 フランス共和国 破棄院 Simone Rozes 名誉院長外9名来学、総長及び関係教官と懇談 | 30日 総長、高等教育・研究機関の調査並びに学術交流に関する意見交換のため、ドイツ連邦共和国を訪問(11月6日まで) |
| 13日 中華人民共和国 陸 琪 在大阪総領事外2名来学、総長及び関係教官と懇談 | 31日 中華人民共和国衛生部代表团 顧 英 苛 副部长外5名来学、関係教官と懇談 |
| 15日 京都大学市民講座「みち」第1日(以後、10月22日、29日) | |
| 19日 国際交流委員会 | |
| 〃 国際交流会館委員会 | |

